

文學研究の根本問題

坂 本 浩

私が大学を卒業したのは、昭和の初めにやや近い頃であったが、この時期になると文學の研究ということについて、一つの大きな変化が見え始めていたように思う。それは研究対象とか範圍とかいつたものが、次第に専門化し、それだけ狭

められてきたということである。大正の半ばごろ大学を卒業されて、今なお花々しく活躍されている先生方、たとえば岡崎義恵（大正六） 斎藤清衛（大正七） 久松潜一（大正八）などの諸大家について、常に私が畏敬の念を禁じえないのは、これらの方々の学問の世界が実に広範圍にわたつているということである。専攻されるものは勿論あるのであるが、それが狭い範圍にとどまることなく、上古から現代に至るまで絶えず広い視野を保つていられることは、まことに驚歎に値する。ところが昭和期に入ると、すでにこれほど広範圍に及ぶ

学者が次第に少くなつてきて、自分の専門というものが特に強く押し出されてきた傾向が見えることを否定することができない。一々個人名をあげるとは差しひかえるが、この時期以後に学問の世界に出てゆかれた方を、だれかひとり考えてみれば、必ず専攻の範圍を明確に名ざすことが容易にできるであらう。

ところが最近になつて、もう一度改めて考えなおしてみると、昭和も半ばごろ以後に至ると、さらにこの変化はいちじるしくなつてきたことに気づく。つまり最近学問の世界に出てゆく人々の傾向は、専門化したというより、むしろ末梢的になつていくといつても過言ではないであらう。専攻する時代が限られたといつた程度のもではなく、ある作家、もしくはある作品については、きわめて深く突き込んでいるが、それ以外のものは自分の範圍外に属するといつた感じがしないでもない。昭和に入ると大正期に比べて狭くなつてゐる

が、さらに最近に至るとこの傾向が極端化されていると、私は感じないわけにはゆかないのである。

私はこのように言つたからとて、それを一概に悪いと申し立てるつもりはない。もともと学問というものは進歩するにつれて次第に狭く鋭くなつてゆくというのが、自然の勢いであらうから……。ただ私が特にこのような反省をしてみる必要があると信ずるのは、あまりにも末梢的な問題にばかり、日夜頭を突きこんでいると、研究する根本の目的というものを見失いがちになることを恐れるからに他ならない。ことばを換えれば、文学研究の根本となるべき問題を喪失しやすいということである。狭く深く究めることが悪いのではない。それが常に文学研究の本道にいか結びついているかという反省を忘れることが悪いのである。末梢的と私が言つたことが非難の意味を含んでいると感ぜられるとすれば、今述べたような欠陥に陥りやすいことに対する警戒の気持を汲みとつていただきたい。なぜなら、この一文は何よりも私自身に對する自戒の意味から書かれていものであるからである。

最近の研究がきわめて狭く末梢的になるのに比例して、今一つの傾向がいちじるしく目だつてきている。それは自分の立場というものを、出発の初めからある一定した理論に樹立し、そこから一步も離れることなくして、すべての対象を斬つてゆくという傾向である。その人個人にとつては、少くとも自己を生かす理論というものは長い間の探求の結果おのず

から見いだされてくるべきものであるにかかわらず、結果が先に与えられて、そこから出発するというのでは、何か逆立ちしたような感じがする。自分の立脚地が固定したものとして、結論的に与えられているのであるから、研究の範囲はどのようにも拡大されてゆく。何を対象としても、それを料理する庖丁は常に一本に限られているからである。従つて範囲は広くなるが、それはきわめて浅い。しかも出てくる答えは常に一つである。

ここでも誤解を避けるために、一言つけ加えておくが、私はこのような傾向が全く意味がないなどと言おうとしているのではない。現在の研究態度がともすれば末梢的になりがちな時に、このような傾向があつて、広い視野から一つの大きな見通しの下に、複雑な文学の世界を整理してみせることは、それだけでも意義をもつものである。ただ私の言いたいことは、一つの理論的立場にあつて、あらゆるものを割り切るといふ芸当に没頭するあまり、文学研究におけるもつとも大切な根本的なものを忘却することを警戒する必要があるという一事なのである。文学を研究しながら、その根本となるべき文学から逸脱してしまうことを恐れるのである。そしてこの点あまりにも末梢的な研究態度が生みだす弊害にも劣らない、恐ろしい結果をもたらすことが心配されるのである。この点について深く考えてみることは、少くとも私自身にとつて大きな反省になると思ふのである。

誇示でもなく、懺悔でもなく、ありのままの過去をそのまま語るのであるが、学校を出てからの十数年間、私は手あたり次第に書物を読んだ。古典もあれば、わが近代文学もあれば、研究もあり評論もあつた。ことに外国文学に關するものは、貪るように読みあさつた。そして、どのようなものにも

感心した。対象も立場も主張も、何もかもすつかり變つて書かれてゐるのに、どれもこれも私を深く動かした。そのうちに、私は一種の不安と焦躁に驅られるようになった。いくら読んでも結局、自分自身の立場というものが無いことに気がついたからである。私の目の前に広げられている書物を書いた人は、確たる立場をもち、一つの信念をもつてゐるのに、私にはそれが無い。ある立場のものを読めば感心するし、それと異つた立場のものにも深くひきつけられる。一体、君自身はどうなんだ——という声を聞く思いが絶えずした。自分がひどく頼りなかつたり、いやになつたりした。

このよう経験は何も私のみに限つたことではないかもしれない。柔軟な心と燃えるような知識欲をもつてゐる、若い世代の人々に共通することかもしれない。しかし、私の経験に即して言えば、それは若々しい知識欲というもので説明しつくすことはできないと思う。それより、私自身が読書というもの

の性質を究めていなかつたことにあるようである。つまり数多くの本を読むことは、空虚な頭に知識をつめこむことであると考へていて、眞の読書とは書物を鏡として自己の芽を引き出すことであることに気がかなかつたのである。もう少しつきつめて言えば、眞の読書とは他人の書いた本をえさにして、自己内面の可能性を釣りあげるものだという、きわめて自明なことすら、当時の私には十分に納得できていなかつたのである。

空虚な頭の中には、とれだけでも知識をつめこむことはできる。しかし正直なもので、かくしてつめこまれた知識は、年月がたつにつれてまた吐き出されてゆく。吐き出されるといふ言いかたが変に聞えるとすれば、忘れられると言ひ直してもよい。その意味において「人間とは志却の動物である」といふことばは、人々が考へる以上に深い眞理を含んだものであるのだ。ところが他人の書物をえさにして自己の中から釣りあげたものは、いつまでも忘れることがない。あるいはこう言つてもいい、他人をだしにつかつて自己の可能性を伸ばしたものは、もともと自分の内面から生まれただけに、忘れようにも忘れることができないのである。頭にかぶつた帽子は風に飛ばされる。だが頭に生えた髪の毛はひつぱつても容易に抜けるものではない。

空虚な頭脳の中に種々雑多なものをつめこむ。それは空腹な人間にはあらゆるものが美味なのに似ていよう。しかし不消化のままつめこまれたものは、身体の栄養となることなし

に排泄されてしまう。私はこの報いとして、いやというほど自己の愚かさを反省せしめられることになった。乱読の中に十数年の貴重な歳月は流れていった。そしてその間に私の読んだ数多くの書物は、古本屋の利益となつて消えるか、私の書架の一隅に塵にまみれて眠つてしまつた。いや、形を具えた書物が私の前から姿を隠す遙か以前に、私の頭の中から消失してしまつていた。

それにもかかわらず、不幸中の幸といおうか、私のその後の歩みに決定的な影響力をもつに至つた幾冊かの書物も、その中に交つていた。これらこそ私の心の地中に深く眠りながら、発芽の時期を待ちつづけていたものを、自覚させ伸長させてくれたものであつた。それらの書物は、いわば私に代わつて幾年か幾世代か前に、ある人々が書いてくれたものといつてもよかつた。しかも当然なこととして、それらの書物には共通したものが一貫して流れているのである。それは文学に對する限らない愛情である。たとい対象も方法も全く異つていても、その作者が文学を愛する心情を内部に深く蔵しつづ物した書物に限るといふことであつた。そしてそれこそ、私が文学研究の根本的態度と呼んだものに他ならない。

このように私と言えば、人はあるいは、きわめて平凡なことではないか——と嘲笑するかもしれない。お説の通り、平凡きままることである。ただ忘れてならないことは、絶対の真理は常に平凡なものであるといふことである。そして平凡

であるゆえに、人々は自明の理として常に無視しがちなことであるといふ一事が、さらに注目すべき重要事といわねばならぬ。この世に人間として生まれたといふ好運に幸されながら、その生涯を文学の研究に捧げるといふからには、そこには比較を越えた文学への愛着があつたはずだ。文学の神は嫉妬深い神だといふことを百も心得た上で、その神へ生涯かけて奉仕しようといふ決意のない人間に、文学の秘密が扉を開くはずはない。叩けば開かれんといふ一語を心の救いとして烈々たる文学愛に燃えた日のあつたことを、人々は常に顧みねばならない。だが信仰がそうであるように、文学へ對する愛情も、いつしか情性の俘虜となる。きわめて平凡なことではないか——という嘲笑がそれを物語る。文学研究の態度が末梢的に流れたり、出発の当初から結論が出されていたりするといふことも、そのことと無関係ではないであらう。

ゆくりなくも私に思い出される一つの文章がある。

文学の理解もむづかしいが、そのかげにゐる人をつかむことは、幾層倍むづかしい。書かれた文学よりも、書かれずにゐる文学の方がいかに多いかといふことが、はつきり分かつた。紙の上に書かれた文学については、それがさう表現されてゐる以上、可成りな鈍眼なものでも、氣の利いたやうなことを何かとならべ得る。だが書かれずにゐる文学、身についた文学、心に蓄積された文学、さういふも

のは、うつかり見過してしまふ。だが、その書かれずにゐる文学を見過してしまつたら、書かれた文学の意味も完全に分つたといへない。而かも偉大な作家ほど、この書かれずにゐる文学が多いのである。

では、その書かれずにゐる文学を知るにはどうするか。まづ作家の直話を聞く、その時代を研究して作品との關係をつかむ。資料をあさる、傍証をかためる、作品よりの帰納、側近者の談話、いろいろの手段がある。だがこれ等の手段は誰しも文学研究者といはれるほどのものならやることであり、やらなくてはならぬことである。わたしの考へによると、かういふ小乗的手段を統一する大乘的な研究手段がある。それは心で心を迎へることである。これが一番むづかしい。わが心の境地で彼の心の消息を不言の間に了悟する。これがないと、書かれずにゐる文学の味ひを味ふといふことが出来ない。然しそれには、不断に読書修養してわが心の向上といふことにとめないで、彼の心の消息の片はしに接することも出来なからう。

「心で心を迎へる」——なんとという見事なことばである。私が平凡にも、文学に対する限りない愛情といつたのも、つまりはこのことであつたのである。このことばは柳田泉氏が「幸田露伴」の「序語」の一節に書いていられるものである。柳田氏といへば、人も知ることく、明治文学研究の

大家、しかも資料蒐集家として著名な方、私も度々御迷惑をおかけした先輩である。このことばを読んでから、私は氏を資料家として限定することの非を心底から教えられた。資料は資料のために集められるものではない。心をもつて心を迎へるための一手段にすぎないのである。文学研究の根本的態度に正座した人によつてのみ、初めて資料は生きた生命を与えられるのである。

三

昭和十年代に私の愛読した書物に「日本文学全史」という十二冊の叢書があつた。上代・平安朝・鎌倉・室町・江戸・明治と全時代にわたつて、それぞれの権威者が書き下した詳細な文学史である。企画にあつては、当然一貫した執筆態度が相談されたはずにもかかわらず、実際書物になつたものは、それぞれの学者の研究態度がおのずから具体化されて、各時代史は個々の著書の独自性を伝えている点興味ぶかいものがある。この時も私は、それぞれの学問的個性に心ひかれながら丹念に通読した。

現在に至つて静かに反省してみると、それらの多くは単なる知識として、大部分は忘却の彼方に消失してしまつていくことに気づくのである。必要に応じて改めて部分的に開いてみることは、今も変りないが、いつたいこんな所をかつて読んだ経験があつたかという気持に駆られることがしばしばで

ある。文学史などというものは、あるいはそれでよいのかも
しれぬ。無限ともいつていいほど数多くの史実を一々細かに
暗誦することは、それほど意義あることとはいえないかも知
れぬ。それにもかかわらず、この全史の中には私にとつて一
つの例外があつた。それは平安朝の上・下二冊を書かれた五
十嵐力氏のものである。この二冊は他の時代と變つて、真に
特色ある、いわば風變りの形式をもつたものである。

文学史というものは、客觀的な正確な資料の必然的な展開
を示すべきものであるのだろうか、平安朝以外のものはすべ
てそのような態度で貫かれてゐる。従つて読者は、少くとも
その一員である私は、そこに智識の対象となるもののみを見
た。ところが平安朝のみはそうではない。むしろ大胆な資料
的選擇がなされ、極度に作者の主觀がにしみ出ている。この
ことは標題となつたものを見ただけでも十分に察せられるで
あろう。「愛情の珠玉を聯ねた『伊勢物語』」「不運幸運の
『大和物語』」「愛慾に翼したる『和泉式部日記』」「大空に
孤高を持したる『枕の草子』」「偉大なる集成的創建の『源氏
物語』」「短歌をめぐる傍系の惑星歌群」「王朝文壇の宗主、
短歌」といつた項目が並んでいる。そしてそのような主題の
もとに展開される叙述は、著書のこの時代の文学に対する深
い愛情に濡れているのである。私はそこに正確な知識のつめ
こみを強いられなかつた。著者の切なる愛情に導かれて、平
安朝文学に対する限らない憧憬をそそられたのであつた。一

言で尽くせば、文学の秘密に開眼する思いにみちて、一枚一
枚を読んだ。

だが、ここでもことわり書きが必要であらう。一般的に言
つて、このような風變りな文学史が正道であるという自信は
私には今もない。いな、他のすべての力作に対して、この著
書が断然すぐれていると言つつもりもない。私がこのような
ことに言及したのも、この平安朝文学史は学界においては不
評であつたという事実を改めて考えたいためである。さらに
つけ加えて言うならば、文壇の評論家で日本文学に関心を抱
く人々にとつては、ちょうどその逆で、平安朝のみが興味を
もつて愛読されたという批評があつたという事実についてで
ある。由来、文壇と学界の対立意識というものは、近代日本
がその未成熟を物語る悲しむべき事実ではあるが、ここにも
それが現われたにすぎないと、簡単に見のがしていいもので
あろうか。そのいづれに軍配をあげるかという結論を急ぐ前
に、とくと私たちは考えてみる必要があるのではないか。

歴史学というものが、「どのようなものであるか」あるいは
「あるべきか」というようなことについては、私はほとんど
ど知るところがない。歴史とは、過去へさかのぼつてその跡
づけをすべきものか、あるいは過去を現在によみがえらすこ
とか、それとも未来への予見を導き出すべきものか、それす
ら私には不案内である。ただ知つてゐることは、文学史とは
文学それ自体の史的展開であつて、文学についての資料の羅

列ではないということだけは確かである。しかも、文学に対する価値評価は、多かれ少なかれ、それぞれの人々によつて異なるということは、これまた当然なことである。とすれば、現代に生きるある一人によつて物された文学史は、現代という鏡によつて映し出された、その人の心の影であるという面があることを否定できないはずである。飛躍して言えば、客観的事実に働きかける強烈な主観なくして、生きた歴史は書けないはずである。またしてもくりかえすが、この「強烈な主観」こそ、私が文学に対する切実な愛情といつたものには他ならない。

長い間の沈黙を破つて、最近保田与重郎氏が書かれた文章の一節につきのような箇所がある。

尋常に考へられてゐる考証の技術などは、学び得る類の学者の特技でなく、むしろ学者の特技とすべきは、広漠無限な知識と出入自在の記憶、疾風迅雷的頭脳の回転、飛躍無限な推理、複雑多様な聯想、さうしたことこそ、考証の特技といふべく、さらにそれ以上に重要なことは、史料をよくむに當つて、雄大奔放な想像力を駆使し得る詩人的能力である。こゝに史学考証家は詩人でなければならぬといはれる所以があり、且つ詩人の所詮の興味と事業が、史家の考証に於て完成することは、最大詩人の当然の宿命である。

学界の一隅につながる私としては、快よい反省を与える刮目の一文であつた。それにつれて思い出されるのは、保田氏の一文にかなりさかのぼつて物された小林秀雄氏の「無常といふ事」に収められた数篇の評論である。末梢的なことではあるが、最近この中から大学入試問題がしばしば出題され、その意味からも確かに注目を引くに至つたという皮肉な運命をもつた書物である。裏返して言えば、これは国文学専門の大学教授にも、この本の存在理由が肯定されたことの証明とも考えられるであらう。

フランス文学に深い造詣をもち、公式主義のプロレタリア文学の理論に対しては、「文学批評とは自己を語ることであり」という逆説的主張をもつて戦いつづけてきた小林氏が、長い遍歴の後に、わが国の古典の世界へも足を踏みこまれたことは、すでにそれだけで私の驚きであつた。それにもまして私の心を動かししたのは、兼好や「平家」や西行や実朝の実体を、詩人的直観によつて生き生きと今日によみがえらせた、その見事な筆致であつた。いや、これは筆致などというべきものではない。魂といふべきであらう。しかも見おとしてならないことは、この文章は文壇の評論家の単なる主観的表白ではなく、正確な資料的研究を裏づけとして、ほとんどその影をとどめえないまでに詩心によつて昇華されたものだという一事である。兼好・西行・実朝らについては、これまでに学者の研究が数えきれないほど数多くある。むしろありす

きて困るほどである。それにもかかわらず、この小林氏の研究（あえてそういうが）に比肩する傾向と特色をもつたものは、いまだかつてなかった。これは専門の学者にとつても、素人の垣のぞきにすぎない——といつてすまされるべきものでは断じてない。書かれている内容自体というより、もつと広く、もつと重要なこととして、学問研究それ自体について、一つの大きな反省を与えるものとして、謙虚に考えるべきものであろう。極端な言いかたではあるが、このような研究をつきつけられて、はつとわれを顧みることがないとすれば、それはわが学界の救いがたい硬化を物語るものともいえる。私は学界の末席につらなるものとして、そんなことはありえないと信じたし、またありえないことを祈るものがある。

四

古典の研究が何よりもまず資料的整理なくしては一步も進みえないことは、私とても十分承知しているつもりである。そのような操作を前提条件とせざるをえないところに、はるかに上代にさかのぼるわが古典の榮譽があると思つてゐる。数々の昔の学者たちの骨身をけずる努力に、私は素直に頭をさげるものである。そして明治から大正にかけても、われわれの先輩たちの不断の古典研究には敬意をばらうにやぶさかではない。ただ、私が先に記したように昭和に入るにつ

れてこの学問の伝統を継承しながら、そこには一つの変化が見られてきたことは、やはり注意しておきたい。それは大正までの学者たちの研究には、いかに資料的なものがあつても、文学に対する燃えるような熱意がこもつていたことが感じられるのである。資料的整理は文学の秘密の扉を開くための鍵であるという信念があつたのである。従つて扉を開いて一日も早く文学の醍醐味を味わいたいという切なる心情が、常に裏に隠されていたように思う。手段と目的の混同は決してなかつた。そこからこれらの人々の熱情は、広く対象を求め、深くつきこんでゆこうとすることを忘れなかつたのである。

ところが、だいたい昭和に入るところから、そこに前に述べたような変化が見え始める。前代の方法論を継承したように見えながら、それは形に止まつていて、精神は見落とされたのではないかという気がする。そこに手段を目的のように考える錯誤が生まれる。これは伝統の継承が、常にそのような形をとりやすいという一般的な現象のみのゆえではないと私は考えたい。私はそれよりさらに大きな原因として、西欧から移入された科学的態度というものが、大きな影響力をもつに至つたことをあげねばならない。人も知るように、この時期は一方でプロレタリア文学の最盛期に属するころであつた。客観的理論が文学を見事に割り切ることを信じた時代であつた。この風潮はその力の及ぶところ真に大きく、科学的

な考えかたをぬきにして、少くとも知識人たる資格はないように考えられたと言つても過言ではない。プロレタリア文学が凋落期に向かつた後も、この科学的態度を重視する傾向は、戦時中を経て今日に至るも少しも衰えてはいない。

古典研究が資料的方法論を絶対視するに至つた態度も、この一般的風潮と無関係ではなかつた。学問は科学的でなければならぬという大前提が、巨巖のように屹立している。真に身を寄せるに安全な場である。主観的な鑑賞的態度など、印象批評に過ぎない——という一言のもとに、きわめて簡単に葬られてしまうという状態であつた。先に述べた五十嵐氏の平安朝文学史が学界に不評であつた理由も、そこらあたりにその原因を見いだすべきであろう。前代の学者の心底に脈うつていた文学へ対する熱情はいつしか忘却され、資料万能の研究態度だけが、形骸として受け継がれたのである。ほとんどマニヤ的な偏執が、ある特定の範囲を限定して注入されるようになった。古典研究は分化するとともに、ますます複雑化してきた。研究が進むにつれて、益々真相の把握は不分明になるような感じさえするに至つたのである。

かくして、学界は文壇と明確な一線を画し始めた。文学への切実な愛着を自己の宿命と観じた当時の若い世代は、自己の生き身は無惨にも殺戮して資料的研究に身を投ずるか、それではなければ学界と縁を切る決意をもつて文壇へ飛びこむことを企てるか、二者選一の窮地に追いこまれていつたといえ

ると思う。このような私のことばが、あまりにも極端な神経質な一面観と感じられるとすれば、それはこの昭和初期の傾向がいつそう末梢的兆候を露呈してきた現在を考えながら、書いているためである。最近大学の国文科に席をおく若い学徒たちで、このような苦惱を身をもつて悩んでいないものはほとんどないといえよう。私は機会あることに、それを目で見、耳で聞かねばならなかつた。いつたいこれを末期的現象といわずして、なんと稱すべきであろうか。

だが、私がこの章で言いたかつたことは、古典研究についてはない。古典研究に根づよくわだかまつている資料的態度が、近代文学研究にも大きく作用しているということについてである。いな、そういうよりも、昭和初期の古典研究を色づけた科学的態度という巨巖が、ひとしく近代文学にもその恐るべき影響力を及ぼしてきたというほうが、より真相に近いであろう。ここでも私個人の直接経験について、ありのままに書きつけてみたい。

近代文学に関係ある多くの学者たちを網羅して、明治文学会が創設されたのは、奇しくも私が大学を巣立つた年であつた。卒業論文に明治期の文芸思潮をとりあげた私には、このことは思いがけない幸運であつた。私はこの研究会のことを思い出すにつけ、何とも形容しがたい懐かしさと、私を育てあげてくれたことに対する深い感謝とを常に心に抱かずにはおられない。幹部となつた諸先輩には学者もあれば評論家も

あり、詩人もあれば小説家もあつた。また次々と卒業してこの会に加わつた私より後期の人々には、創作を志している若い文学志願者も多かつた。従つてこの会は、どのように研究態度を異にする人々が会合しても、文学を愛し文学に献身しようとする熱情を忘れなかつたのであつた。おそらく当時の古典研究会が想像もしないような雰囲気にみだされていたことを、私は今も信じている。柔軟な若い魂と燃えるような知識欲をもつていた私には、この会は文字通り修業の道場でもあり、靈感の泉でもあつた。もしこの明治文学会がなかつたとしたら、今日の私はなかつたであらう。

しかし遺憾なことに、この会すら昭和初期のプロレタリア文学運動の影響から超越的に存在することは評されなかつた。そこには広い意味での文学的立場に立つ人々に対して、社会科学の理論を勇敢にもちこもうとする一群の人々が、明確な対立を見せ始めた。幾度か幹事会が催され、両者の調和がはかられたにかかわらず、ついに妥協点を見いだすことができず、後者の急進派は脱退して別に明治文学談話会を組織し、残つた幹部は責任を負つて総辞退するの結果をまねいた。その最後の報告を聞きながら、私は心の痛む思いがしたことを、今もありありと思ひ出さざるをえないのである。パトンは若い人々に渡された。こうして第二期の明治文学会はいつそう純文学的色調を濃くおし出すことになつたのである。

私はいたずらに過去の夢を追おうとするものではない。数年前に新たに組成された近代日本文学会の性格を、あの明治文学会に比較し、そこに私が今言及した客観的・資料派の態度が強く際立っていることを考えてみたい。ために他ならぬがあつた。当時もつとも華やかな活動を見せていた評論家もいたし、「近代文学」による著名な同人たちもいた。明治文学会解散の後久しく会わなかつた旧会員たちも数多く交つていた。私は隅つこに座しながら、今こそ明治文学会の復活を予想しながら、人知れず心を躍らせていたのである。

しかし、近代日本文学会には、その後はつきりした線がおのずから浮き出してきた。それは資料的研究態度と名づけてもよいものように私には感じられた。もちろんこれにはそのうなるだけの意味もある。明治という一時期が、ことに終戦を契機として一つの過去の存在となり、しかもその明治に生きた文学関係の人々も次第にその数を少くしてゆく。今にしてその人々の直話によつて真相を明らかにしておかねば、将来は不確実になつてしまうことが多い。それと同時に戦災によつて数々の貴重な資料は失われた。これらも現在という時期をのがしては、再整理する機会も逃げてしまふであらう。古典がそうであつたように、明治文学という古典的存在にも、資料的な研究をもつとも必要とする時期が現在であるという点は、私にも納得されるように思うのである。それに

もかかわらず、かつての明治文学会が当時の私に對して果たしてくれたような役割を、全然無視していいものであろうか。すでに一家をなした学者たちの基礎的研究だけでなく、今も變らず近代文学への切なる愛情に心熱して学校を巣立つてくる若い世代の人々にも、失望を与えないだけの広がりはあるてほしいと思う。これは不熱心のそしりを甘んじて負うべき私のひねくれた誤解にすぎないであらうか。少くとも最近の実情に即していえば、作家・評論家関係の人々の足が遠のき、同時に若い人々の関心が薄くなつてきているのではないか。正直に言うが、私がそれほどの魅力を感じなくなつた原因は、少くともそこらあたりにあると言わざるをえないのである。

資料というものがあくまで手段であつて、目的でないことは、やはり考えてみる必要がある。少なくとも私にはそう信じられる。その意味において、初版本や過去の雑誌を蒐集することが、学者のすべてであるはずはない。むしろ、それらの資料がいかにか作家や作品の研究に直接に結びついているかが問題である。柳田氏のことばを再び引用すれば「これ等の手段は誰しも文学研究家といはれるほどのものならやるとである。(中略)かういふ小乘的手段を統一する大乘的な究極的手段がある。それは心で心を迎へることである。」一言にして尽くせば、最後の目的はあくまで文学自体の秘密を究明することにあるのだ。

私の脳裏に浮かぶ一つの情景がある。あれは鷗外研究を目的とする会合であつた。鷗外の近親者を迎えてその思い出話を聞くことになつていたが、いつまでたつても講師があらわれない。司会者の説明によると、しばしばそのようなことがありがちであるということであつた。もてあました時間をうめるため鷗外についての新しい資料についての話が若い学者たちの間に出された。その時ひとりの学生が立ちあがつて、鷗外はどうしてえらいんですか——というきわめて純真な質問を出した。それに対して著名な学者からの返答があつた。えらいと思わない人にはえらくない、それはそれぞれの人の考えなんだからしかたがないではないか——。その鋭い一言に、その学生は赤い顔をしてすわつてしまつたのである。その席にいた私には答えられた方の信念は十分くみとることができた。そのようなことばはその人にとつて真実であつたことを今も疑つてはいない。

しかし、鷗外文学が神に近い存在として敬意を集めている他面において、その文学に對する新しい世代の疑惑もまた存するという事實を私は知つているのである。この両面の対立について謙虚な態度で討議するところに鷗外文学の真価が再評価されることは明きらかであらう。明治文学の新しい研究は、一例をあげていえば、そのような広い部面をもつていのである。肯定するにしても否定するにしても、等しく深い愛情の発露でなければならぬ。そしてこの愛情こそが資料を

生かす生命であることを、私としては断言せざるをえないのである。たとえば小宮豊隆氏の「夏目漱石」の類まれな見事さは、どこから生まれたかを考えてみたまえ。莫大な資料の裏づけと、その的確な整理、それだけではない。わが師を敬愛し、その文学を熱愛する著者の心情が、この大著を真の意味の名作としていることは否定できないではないか。

最近愛読した書物に、伊藤整氏の「日本文壇史」がある。

私は郷愁に似た懐かしさをもつて、明治初期・中期の文人たちの苦難の歩みを顧みたのであつた。文字通り興味につられて読み進んだ。その中に私の心に一種のながい反省が動き始めることをどうすることもできなかった。著者はあえて「文学史」と呼ばずして「文壇史」と呼んでいる。そこには著者の謙虚な気持があるのであろう。けれどこの謙虚さが私には一つの皮肉のように感じられてきたのである。それは文学史が当然もつべくしてもちえなかつたものを、この「文壇史」は生き生きと所有しているというのであつた。ことばを換えて言えば、私たち近代文学研究家が、今まで見おとしていた盲点を、この文壇の評論家によつて見事に衝かれたということである。私たちは、この著者によつて私たちの著書が引用されていることに、ある種の誇りを感じべきでは絶対にはない。いわば数多くの資料的著述を十二分に利用し駆使して、一つの文学的著作にまで高めた著者の態度の中に、私たちへの大きな反省が与えられていることを心すべきであると思

う。しかも、それらの資料を生かし、形骸にすぎなかつた明治期の作家たちに生命を与えたものはないであらうか。すぐれた小説家としての著者の心眼ではなかつたか。資料は、だしに使われたにすぎない。ここには文学に生涯を託した一文人の美しい魂の結晶がある。それはある意味において、小林秀雄氏が古典に対して果たした仕事とも通い合っている。私たち日本文学研究家といわれる人々が、科学的、客観的研究方法というものを金科玉条として、資料のみに没頭している間に、文壇関係の人々によつてどんどんと侵略されているではないか。私が皮肉といひ反省といつたのも、そのことを自覚したために他ならない。

五

古典研究に重視される科学的態度が、近代文学の研究にも見られることについて、私は自戒のため述べた。このような傾向はさらに明確な意識の下に社会派的研究態度の中に見られるのである。社会派の態度とは熟さぬことばであらうが、文学研究の主要な焦点を、その文学を規定している社会とか時代の究明に向けようとする態度である。その代表的なものが国民文学を主張する一群の人々の中に見られるといえるであらう。私は残念なことに、この方面についての詳細な知識をもつていない。少なくとも大局的な意味の理論づけが成立しているかどうかを知らない。ただ機会あることに、この派

に属する人々の研究発表を読み、いわば直感的に感ずるのであるが、国民文学の立場に立つ人々は、いつたい昭和初期のプロレタリア文学をいかなる点で超克しているであろうかという疑問を常に抱くのである。

プロレタリア文学に関する資料的整理は、他の人々よつて熱心になされている。しかし、この大きな文学運動の功罪については、結論的なものがまだ出ていないように思う。たれしも昭和文学について語る場合、一応の批判をなしている。それは案外観念的常識的な域を脱していないではないか。むしろ結論的な裏づけは、資料の整理を待つて初めて可能になるのかもしれない。ただ私に明きらかと思われることは、理論はそれだけでは決して文学を生まないという厳然たる事実である。プロレタリア文学の場合、何よりも「無産階級解放のため」という目的と、広い意味でのマルキシズムに基づく理論的方法論は、一貫して動かなかった。にもかかわらず、目的と方法の明確さは、そのまま直接にはすぐれた文学を生まなかつたのである。この事実は私に観念というものが文学の世界にもつ限界性について教えるところが多い。

ところで国民的文学ということばの「国民」も、果たして観念ではないのであろうか。そうでないことが明瞭にされれば、必然的にそれはプロレタリア文学の理論と実践との矛盾の超克になるはずである。観念であるかいなかは、歴史の流れが決定することも知れぬ。しかし、そういつてすまされ

ないとすれば、おのれらの信ずる理論的立脚地が文学究明の操作によつて導き出されることが必要であらう。この意味において、観念とは無数の事実の中から抽象される時のみ、真の力ある理論となるのである。では、国民文学の「国民」はかくして樹立されたものであるか。私が初めにちよつと言及したように、方法論が先天的に与えられていて、その見地に立つての究明のみが行われているような感じをとどめえないのである。この場合の理論は過去の文学検討から必然的に生まれたものではない。最初の立脚地は文学以外の世界にある。その立脚地からのミスポットライトは向けられている。そういう言いかたが極端であるとすれば、ここにも客観的という西欧移入の科学的研究態度の巨巖が、同じく横たわつていると言ひ換えてもよい。

かくして複雑な文学現象は、ある一定した線に沿うてのみ切りとられてゆく。理論的立場は現象の解明の明確さによつて、あたかも真理のごとき感じをもつて魅惑する。だが注意を要することは、割り切りかたの鮮やかさは、複雑の単純化でなくして、常に同一の答えしか生み出さないという単一さに過ぎないということである。理論が観念的というべればかぶつていないかという点についての厳格な反省がなければならぬであらう。

国民的文学と相並んで、最近の評論家の間に見られるもう一つの現象がある。それは多くは外国文学の理論に従つて、

わが近代文学を究明しようとする動きである。この場合も、やや極端な言いかたをあえてすれば、理論的立場が外から借りられていて、解析はその借り物によつて果たされてゆくということである。たとえば西欧文学を少しやつた人なら、だれでもすぐかの地の文学における個人対社会という問題に気づくであろう。そのような見点に立つて、わが近代文学を見通しさえすれば、そこにわが文学の特殊性は一見して明きらかである。問題はいかにしてその特殊性がわが国に存在せねばならなかつたかという、その宿命的な現実にあるに相違ない。あくまでも現実からの究明であるはずだ。けれど移入された方法的形式は、現実的宿命を度外視しても、十分にその偉力を發揮する。いな無視することが、かえつてその切れ味を見事にする。そこにもまた理論が観念的になる恐るべき陥穽かむなを私は見ないわけにはゆかない。なぜなら理論は抽象的なものにおいてもつとも明晰めいせきであるからである。

最近「谷崎潤一郎の文学」という本が出た。執筆者の多くは近代文学の研究者たちであつて、それぞれの部門を担当したものを集めたものである。私がその書物について強く感じたことは、その幾多の部分にわたつて、中村光夫氏の「谷崎潤一郎」が引用されていることであつた。もちろんこれは中村氏の著書のすぐれた所以を証明するものでもあらうが、潤一郎を子供だと断じた著書の一見点によつて明確に切りとられた魔術に、研究家たちがだまされた（あえて言うが）とも考

えられると思う。伊藤整氏はその書物の中でつぎのように書いている。

谷崎潤一郎を「思想のない作家」と決定することには私は反対である。世人は、勤王思想を持つとか、共産主義思想を持つとかいふことのみを「思想」と考へてゐるのではないだらうか。物質的条件が人間を左右すると考へたマルクスも思想家であるが、性欲が人間を左右すると考へたフロイドや、優劣感が人間を左右すると考へたユングも思想家である。たとへば「少年」とか「小さな王国」を書いた作家は、よしんばその作品に欠点があるとしてもその思想においては、明治末期の日本では、極めて顕著な思想家であつたと言はなければならない。（中略）

階級思想が思想であることと殆んど同じ強さと神聖さにおいて、一人の個人にとつては、彼の生涯に与へられた肉体的条件を基にして自己の存在を考へることが思想である。それはその存在の対象として異性にも同性にも対比させられ、その対比の間に自己の、従つて人間性それ自体の实在を考へ味ふ土台となる。それは醜い、美しい、禿げてゐる、男である、女である、といふやうな単純な条件の認識から始まるものである。そして階級思想が、この一個人に与へられた絶対の条件である肉体的場に起る思想に較べて、必ずしもより重いとでは言はれないものである。また階

級思想がそれ自体として純粹に存在し得ないやうに、肉体の思想も純粹には存在し得ないだらう。ただ階級思想は、階級変革の可能性を近く見てゐるだけに、より性急に、社会の現象面に現はれて來てゐると言ふにとどまる。

私はこの引用文において、潤一郎文学についての二人の批判の優劣を問題にしようとしてゐるのではない。外から与えられた理論と、内から導き出された理論とを対比して、自分のために考えてみたかつたまでである。それとともに、觀念が生きた理論になるためには、どのようなことが必要であるかを反省してみたいと思ふのである。またしてもいうが文学研究の根本問題として、研究者の作品や作家に対する切なる愛情ということに結びつけて、私はここに引用させてもらつたのであつた。

六

美術について批評や研究をなすことが、美術それ自身の鑑賞なくして、いつたいありうるだらうか。音楽について何かを語ろうとする人が、音楽に愛情を感じていないなどということがあるありうるだらうか。美術や音楽と並んで、ひとしく芸術の一部門を形造つてゐる文学についても、事情は同じであるはずである。何よりも文学を愛し、それを享受しうる人々のみ、文学はその秘密を開いてみせるのである。しかるに実

情は、文学を愛し文学を鑑賞することを除いても、学問的研究はなされてゐるのである。いな鑑賞的態度などは印象批評に過ぎないという非難さえ堂々と横行してゐるのが現状であるともいえる。私には考えれば考えるほど奇妙な現象のように思われてならない。それを奇妙と感じないとすれば、それは何よりも正道からあまりに遠く逸脱して、別の分野にはまりこんでしまつてゐる証左である。

文学の理解が鑑賞に始まり批評に進むことは自明の理であるはずだ。そしてその二つにして実は一つである過程を経ずして、文学研究はありえないことも、火を見るより明きらからであろう。鑑賞とは何か。いうまでもなく、自己を虚しうして対象に深く迫ろうとする操作である。批評とは何か。これまた言及するまでもなく、鑑賞によつて感得されたものへ対する自己反省である。自己を虚しうして作品に没入することは、俗な言いかたをすれば「ほれこむ」ことである。「あばたもえくぼ」の心境になりきることである。かくして感得されたものに対する自己反省とは、その「ほれこみかた」の深度を自己という計量器にかけることである。このような文学享受の実践は、燃えるような愛情を心底深く蔵するもののみに許されるであらう。私が文学研究の根本問題として愛情ということばをくりかえして用いたのも、この意味においてであつた。

一般的に言うのであるが、眞の愛情とは対象と同化しよう

とする切なる希求である。自己が対象と一体となつた刹那、自己はそれ以前に比して深化増大されて帰つてくる。さらに別な範疇に移つて言うが、文学作品とは作家が人生を苦悩をもつて生き貫いた足跡である。個々の作品は、何よりもその作家の人生探求の深淺をあますところなく写し出したものになる。このような愛情と、このような文学作品とを結びつけて、作品に対する愛情という問題を提出するとすれば、それは作品を通じて作家自身と同化しようとするようになるであらう。作家の苦悩に満ちた人生探求を自らもまた再体験することになるであらう。真に文学を愛し、そのゆえにこそ文学的研究に生涯を賭そうとする人は、必ずやこのことを身をもつて経験しているはずである。

もちろんその場合において、相手の作家と自己とが完全に一致することは不可能な時が多い。いかに自己を虚しうして対象に投入しても、そこに幾らかの誤差が生ずるのが自然である。なんとすれば、相手の作家には確平たる個性があるごとく、享受者の方にもまた個性があるからである。このような時、そこに直感された誤差を自己の計量器にかけて、その正体をきわめ、そのよつて来た原因をつきとめ、それに対して正当な価値評価をなすことがすなわち批評的過程である。実際においては鑑賞的過程と批評的過程と二つに明確に區別することはできない。便宜的な分けかたに従つたのであるが、いずれにしてもそれが文学享受の実体であり、学問的研究

究の根底であることは確かである。従つて、鑑賞・批評も文学研究も、当然なこととして、そこにその人の個性的色彩を帯びてくることになるのである。

おそらく多くの人々のつまづきは、ここにいう個性的——すなわち個人による差が見られるという点にかかつていると思われる。学問という客観的真理を明確にすべき厳かなものが、個人によつて価値づけが異なるといふのでは、それはもはや学問とは呼べないではないかという反問を、私は今耳に聞く思いがする。そしてまたしても科学的研究態度といふことが金科玉条として持ち出されるであらう。だが個人の切実な文学に対する愛情を基礎として、一作品を鑑賞・批評しようとする場合、そこに生まれる評価が各個人によつて異なるということとは、私たちが日常経験していることではないか。新聞・雑誌に載せられた小説月評や映画批評などが、批評家の個性に應じて千差万別といつていいほど違つていふことは、平凡な事実である。人々はこれが日常平凡事であるために、文学研究などという厳肅な作業のなから除外しようとするのである。だが、事實は常に平凡であり、真理は常に日常のものの中に生きていることは、いつの場合にも忘れることのできない鉄則である。この鉄則を忘却するところに、文学研究は文学を離れて、資料の詮索となり、評論は他からの借り着でお茶を濁そうとするに至るのである。

このように述べてきた私といえども、もちろん個人を超え

たものがこの世に存在しないと云つてゐるのではない。それは厳として實在する。歴史の審判——長い時の流れの果たすゝの役目である。個人の文学研究はその意味において相対的ともいえるであらう。だが、この場合においても觀念が現実から遊離しないためには、現実には常に相対的以外にはありえないということを、はつきり見通すことである。歴史に照らして自己を正す——ということばは、もつともらしく一応考えられるにもかかわらず、やはり觀念的でしかありえないのだ。一作家は創作に当たつてゐる時、流行のなかに宿る不易を書こうと念願してゐるであらう。だが何が不易なのかという実体をどうして知りえようか。ただ自己のすべてをあげて、書くべきものに体当たりをするだけである。それと同じように、書かれた作品を批評し、あるいは研究する人は、自己が今なしつつある評価が絶対的でありたいと心から希求するであらう。だが、それが絶対的真理であるか否かをどうして知ることができよう。許されたことは文学への切なる愛情に身を任せて、作品やそれを書いた作家の秘密に挺身しようとするのみである。不易とか絶対とか真理とかいふことばが、作家や研究家の間に横行し始める時、それが希求でなくして現実と考えられるとすれば、やはり觀念的なものに過ぎないのである。

科学的と人は言う。それは絶対的真理・客觀的価値を意味するのであらう。だが文学というものは現実に密着するにもか

かわらず、科学をもつてしてはいかんともしがたい領域にも属してゐるのである。それは魂に連なる面である。古人が靈感と呼び天才的直感と呼んだものは、おそらくそのような文学の領域であつたかもしれない。西欧においては科学の進歩とともに、その限界もますます明確にされてゐる。たとえば信仰という魂の領域が、科学的追求の彼方に存することはすでにパスカルによつて明きらかにされてゐる。キリスト教と密接な関係をもちつつ成長してきた西欧文学は、特にこの精神的領域に深く踏みこんだところに開花した。そのようにして生まれた結実である作品を、ある意味においては機械的な科学的操作のみによつて、その秘密を開明しうるはずはない。いや逆説的に言えば、客觀的態度というもので割り切れる底の作品とは、それほど深い奥行きをもつたものではないと断すべきである。

後進国日本のゆがみは、何よりも唯物的・客觀的な面のみを移入するに急であつた点にある。精神の世界や直感的な感受性などを、架空なものとして退ける傾向は、このことと無関係ではない。文学研究の態度として「詩人的能力」の必要を、保田氏が声を大にして叫ばなければならなかつた所以である。私は今や何をおいても、あまりにも一面に偏した研究態度を正道に帰すことの急務であることを痛感してゐる一人である。それにはまず文学研究を文学の世界にとりもどすことの必要を感じ、文学を文学として愛してゆこうとする心情

の回復を考えたのであつた。それこそ文学に生涯を託する宿命になつた私の、切実な希求であり、絶えざる反省でもあるのだ。顧みずして他を言うつもりは毛頭ない。もし他を言うに急であつた感じがあるとすれば、それは自己を明きらめ

感動と古代史 (一)

— 福士幸次郎先生に —

るための止むをえない道程であつた。私以上でもなく、私以下でもない、それがこの一文を草するに当たつて、私のとつた一貫した態度であつた。

(本学教授)

今井富士雄

福士幸次郎先生から最後に貰つた手紙は亡くなる三か月半程まえのもので、昭和二十一年六月二十五日投函と書いてある。

封筒は手製のもので、クシャクシャになつた褐色のクラフト紙を用い、用箋は仙花紙で五枚ぎつしりと書いてある。途中でにじんだインクの色が青赤青と何度も変り、休み休み何日もかかつて書き続けたものに違いない。

終焉の地房州館山に出掛けられる前、世田谷の寓居で病を養つていられた頃のものである。

拜啓やつと手紙にもボツボツ向ける様になつた。ハガキばかりで無くネ。熱も朝はいつも六度台、それが朝めしを喰つたり、何や彼や口を出し、手先出したりするにつけ徐々に七度台に上つて午後に入り十五時頃から十六、七時にかけて其の日の最高が出て三十七度五分あたりにゆく。

医師曰く、肋膜はもう痕跡も残らず、右肺上葉の患部も……と言つて首をひねる。そしてポツリと一と言した処を判断すると、

「この患部を恚うして作つた事は永年のこと^{オホキ}で今のこの状態では本人には抵抗力が自然と出来て居り、病氣と称する程の状態が無い、この通り……と右肺上葉あたりと附近ソ